市民と憲法（第3・4ターム　月曜日5限）

担当教員：岡村 みちる 先生

2021年12月14日

**市民と憲法 論題5「みんな働かなくてもよくなったら？」**

【問】皆、働かなくてもよい社会になったとしたら、あなたは何をしますか？社会の価値観や制度は変わると思いますか？その中で、あなた自身は何をしますか？そして、あなたの次世代・次々世代はどのように生きていると思いますか？(450字～) (配点: 6点+α)

もしも私たちの暮らす社会がシンギュラリティを迎え、労働力がAIに置き換えられ、ベーシックインカムが導入された末に、私たちが働かなくてもよい社会になったとしても、私たちが人間である限り、私たち人間は働き続けているのではないかと考える。

はじめに「シンギュラリティ」と私たちの労働について、仮にシンギュラリティを迎えてしまった場合、現在私たちが行っている仕事の49%がAIに置き換えられてしまうと予測されている[1]。事務員や警備員、工場作業員などの単純労働に関してはAIに代替されてしまう可能性が高いが、一方でソーシャルワーカーやカウンセラー、教員などの他者と関わる仕事、またアートディレクターや俳優、スタイリストなどの一定の技能やセンスを要求する仕事に関しては、代替される可能性が低いと予測されている。

また、人間の欲求を考えたとき、これらには生理的な一次的欲求と、それが満たされることによって生じる二次的欲求がある。マズローが提唱した欲求階層説によれば、私たちの欲求は、一次的欲求である基底のものから上層に向かって「生理的欲求」「安全の欲求」「所属の欲求」「承認の欲求」「自己実現の欲求」の5つからなっており、下層の欲求が順に、上層に向かって満たされていくと考えられている。シンギュラリティを迎え、私たちが職を失ってしまったとしても、「安全の欲求」までを満たすことはできるが、その上層にあたる「所属の欲求」以上の欲求は満たされない。しかし人間である以上、私たちは欲求をなんとか満たそうと考えるため、シンギュラリティ後に残っている仕事、もしくは社会貢献など、仕事以外の所属を探すことで所属の欲求を満たそうとすると考えられる。

ゆえに、皆が働かなくてもよい社会になったとしても、私たちがヒトである限りは「所属の欲求」及び更に上位の欲求を満たそうとして、これまでと違った働き方を含めて、新たな労働を見出そうとするだろう。そのため、労働に対する社会の価値観は、従来どおり変わらないと考えられる。

また、私自身及び次世代・次々世代に関しても、社会貢献や仕事などを通して、生きがいを見つけつつも生きていると思われる。

【参考文献】

[1] 野村総合研究所（2015）．日本の労働人口の49％が人工知能やロボット等で代替可能に

<https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/news/newsrelease/cc/2015/151202_1.pdf> (2021年12月14日閲覧)